

# 34TH EDITION CONCOURS JEAN-PICTET COMPETITION

ジャン・ピクテ・コンペティション  
国際人道法・模擬戦争世界大会

---



**TAKING THE LAW OUT OF THE BOOKS**



# ジャン・ピクテ・コンペティションとは？



ジャン・ピクテ・コンペティションは、スイス出身の法学者であったジャン・サイモン・ピクテ（Jean-Simon-Pictet）の名前を冠した大会です。彼は赤十字国際委員会（ICRC: International Committee of the Red Cross）の副総裁となり、今もなお語り継がれる赤十字7つの基本原則（人道、普遍、公平、独立、中立、奉仕、単一、世界性）を定義づけました。

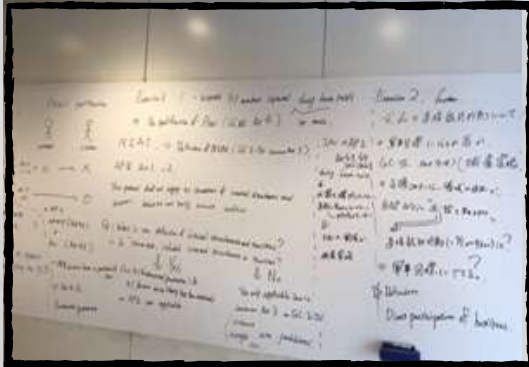
1989年より世界中の学部生及び大学院生向けに国際人道法の世界大会が彼の名前にちなんで始まったのが本大会の起源です。大会では、架空の武力紛争をもとに、その戦争の現場に関わる役割（兵士・人道支援職員・国家公務員等）を与えられ、それに応じて議論や交渉、フィールドワーク等をこなしていきます。



第34回目を数える本年度の大会は、インドネシア・バリ島・デンパサール市で2020年3月7～14日に開催されました。西南学院大学からは初の参加者として、法学部国際関係法学科2年の井上凜太郎・松田早矢・内山敬太の3名が出場しました！

# 国際人道法 (IHL) とは？

そもそも国際人道法とは何でしょうか？サッカーにはサッカーのルールがあり、野球には野球のルールがあり、それらのルールはそれぞれのゲームのなかでしか通用しませんよね。同様に戦争にも歴としたルールがあり、それを国際人道法（武力紛争法）といいます。国際公法という国家間の間に生じる国際問題の際に適用されるルール（法律）の一部でもあります。



春休み期間、ICRCの教材をもとに  
チームで勉強していたときの様子



ジュネーヴ条約原本

国際人道法は、主に戦争当事国の戦闘方法や手段を規制するハーグ法と戦争犠牲者の保護を目的としたジュネーヴ法に分類されます。ジュネーヴ法は主に1949年ジュネーヴ諸条約と1977年の追加議定書から構成されます。私たちは特に後者のジュネーヴ法に焦点を当てて、大会までの約半年間に勉強しました。ジュネーヴ諸条約及び追加議定書の目的は、戦争当事国の手段や方法を規制することにもありますが、戦争に直接参加しない保護されるべき者の命を守ることにあります。

## 【1949年ジュネーヴ諸条約／1977年追加議定書の保護／適用対象】

ジュネーヴ第1条約 → 陸上における傷病兵

ジュネーヴ第2条約 → 海上における傷病兵

ジュネーヴ第3条約 → 捕虜

ジュネーヴ第4条約 → 文民

第1追加議定書 → 国際武力紛争（国家間戦争）

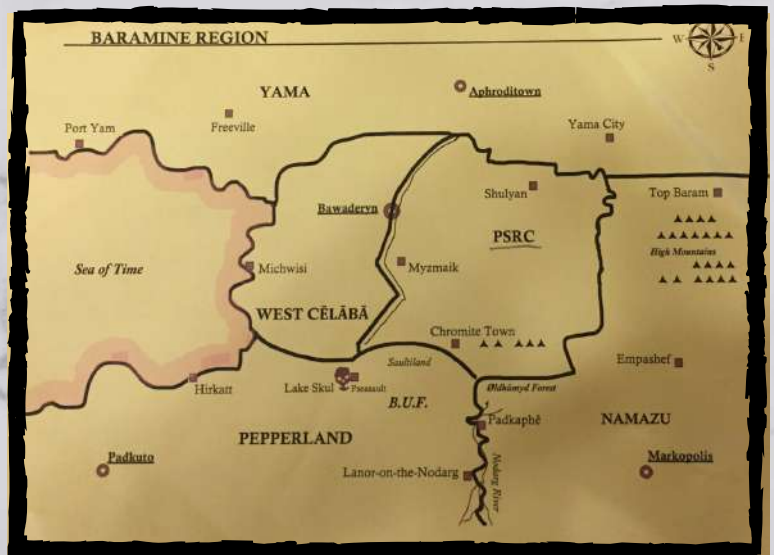
第2追加議定書 → 非国際武力紛争（内戦やテロ戦争）



# 今年度大会の概要

今年度大会は、Baramine地方という架空の地域が舞台で、そこに属する様々な国家に武力紛争の影響が及ぶかたちで展開していきました。南部に所在する国家Pepperlandの北部地域は、Baramine地方の統一を掲げる武装集団B.U.F. (Baramine united forces)に支配されています。中央に所在するPSRCとWEST CĒLĀBĀは、かつてBaramine地方で行われた戦争によって同一の首都が分裂することで生まれた国家です。NAMAZU（日本語の「鯰」に由来してつけられた国家名だそうです！）では、欠席裁判によって死刑を宣告することがまかり通っています。このように、様々な国家情勢が混在している地域であったため、日々移り変わる事態を俯瞰的に眺めて分析することに苦労しました。

## Map of Baramine



大会に向けた準備の段階では、Memorandumと呼ばれる文書しか各チームに配布されず、そこには大会で問題となる武力紛争の背景的な情報のみが記載されています。大会の初日になって配布されるFacts sheetと呼ばれる新たな文書には、数日間の大会で展開されていく武力紛争の火種が描かれています。その後は、刻々と変化する武力紛争の事態に応じた問題用紙が手渡され、状況ごとに様々な役割を演じることを求められます。いずれも実演の数時間前にしか情報を渡されないので、限られた時間で与えられた立場で主張を立ててロールプレイに臨むという過酷な挑戦でした。

# 今年度大会の論点

**B.U.Fに対して武器援助を行う国家が出現！**

→ 当該国家も武力紛争に参加したとみなされるべきか？

**子供兵の養成学校を建設し、自律型兵器（AI兵器など）を使い始める国家が出現！**

→ 国際人道法が保護すべき文民たちがハッキング操作などによって被害に遭うのでは？

→ 子供兵の養成学校を創設することは国際人道法の観点からどのように評価される？

**コロナウイルス感染拡大でBaramine地方が大混乱に陥る！**

→ 国際人道法は疫病からどのように人々を保護するか？

etc...



NGO職員として占領地域に入る際の緊迫した状況



政府高官として国際人道法の歴史的展開を議論



# 論点が抱える矛盾

国際人道法は武力紛争において人間の尊厳を守る法ですが、大会で問われた論点には、本で勉強しているだけでは簡単に解決できない現場ならではの矛盾も多く存在しました。

ex.1: 文民と武装集団の構成員は明確に区別できるか？

昼は農民

夜は軍人



ex.2: 子ども兵は国際人道法のもとで攻撃対象にできるか？



国際人道法の中では、戦争に直接参加しない文民は保護されなければなりません。特に子どもに対する保護は特別なものとして優先されます。このような場合みなさんはどう考えますか？



# 大会中の国際交流

大会中の指導体制として、運営に任命されたチューターが各チームにつきっきりで援助してくれます。私たちのチューターからは、「議論への介入は良かったが、状況全体に貢献するようにしてほしい」と言われ、「貢献」が自身のチームに尽くすことだけではないということをおあるセッション中に気づかされました。



大会の問題設定はバラエティに富んでおり、武力紛争に関わる宗教団体の儀式に、白装束を纏った信者になりきって参加するなど、異文化を体験する機会にもなりました。夜はプールサイドでパーティーするなど、自由時間は本当に気楽に過ごすことができ、他のチームメンバーとの交流も深めることができました。

参加者の中には実際に武力衝突を経験したり、見た目のせいで人種差別を長い間受けてきた方もおり、そんな世の中を変えたいという気持ちでこの大会に参加したと言っていました。そのような経験を持つ彼らは、参加者の中でも一番とっていいほど明るくユーモアがあり、他者に対する優しさも持っていました。





# 参加者の感想



## 井上 凜太郎（法学部 国際関係法学科 2年）

言語、文化、宗教等アイデンティティが全く異なる人々が集まった本大会では、「貢献する（contribute）」ことの重要性について気づかされました。

私たち日本人は「大会」となると勝ち負けに意識を傾けますが、何もわからない問題が目の前に現れた時に、自分自身またはチームでどうにかしようとするのではなく、参加者のアイデンティティを超え、協力し、互いに与えられた0の課題から貴重な1を作るために貢献し合う力が必要なのだと感じました。これは、本大会のみならず、今後の学生生活や人生においても必要とされる力であると思います。セッション中に何をすべきかわからず、挫折していたところ、他大学のチームの方に「何をすべきかわからないのは皆同じで、だからこそこにいる全員で話し合うのではないか？」と言われ、これまでの固定概念は一気に取り払われました。

私は、本大会に参加したことで、自分の成長につながったと確信しています。それは、ここで述べた貢献することの本質について世界大会の場で経験できたということ、そして、本大会の本質であるロールプレイの中で、正義と秩序の天秤をコントロールする力を養うことができたからです。



## 松田 早矢（法学部 国際関係法学科 2年）

今回の大会は「競争する（compete）」というよりも、自分自身を見つめ返す機会になりました。他国の学生に圧倒されるとともに、彼らから気づかされるものがあったからです。

私は1年生で国際商事模擬仲裁大会に、そして2年生でこの国際人道法のロールプレイの大会に参加しました。2つの国際大会を経験しましたが、今回の大会にも新しい意義を見出すことができました。例えば、他国の学生の対応力、ONとOFFの切り替え、チームワークの形成などは恥ずかしながら私には十分に無かった能力でした。中でもチーム内でも言語コミュニケーションがとても大事だということに身に染みて学びました。チーム内で役割分担をしつつ、短い時間の中で知識や考えを共有し合い、お互いのことを称賛し、尊重し合っていたチームが決勝まで残っていたという事実からも、たとえ仲の良い人との間でもコミュニケーションは重要だということが分かります。

コミュニケーションが大事というのを言うのは簡単ですが、今までの私は相手が自分の気持ちを汲み取ってくれる事をどこかで期待していました。しかし何かを成功させたい、解決したいと考えるのであれば、相手への尊重を忘れずに自分の思いを伝えることが必要ということを知りました。様々な国の学生が集まったからこそ日本人である私を自分で客観視して見つめ返すことができたのだと思います。そして次のステップとしては、この経験を多くの人に伝えていき、身近に起こりうる衝突や誤解を減らしていきたいです。





## 内山 敬太（法学部 国際関係法学科 2年）

「伝える（communicate）」とは、言語を使い自分の考えを表現するという意味だけでなく、身体的なリズムや感情を共有することでもあった。

大会ではリラックスするためにプールパーティが開催されていた。そこでは、参加者ほとんどがそこでダンスを踊ったり、プールに入ったりしてくつろいでいた。私はダンスが特技だったので友達からの誘いもあって踊ることになった。踊ってみると言葉を交わさずとも自分を表現できていることがわかった。また、大会でフィールドワークの際、捕虜の人たちと話をし、情報を聞き出すという状況が与えられた。そのとき捕虜の人々が幸い英語を話すことができ会話することができたが、情緒が不安定でまともに話すことが困難だった。しかし、彼らの立場にたち、身振りから感情を読みとって会話すると、彼らの現状などの情報を話してくれるような気がした。

自分の長所は非言語的なコミュニケーションを取ることが出来るということだ。わたしはダンスを踊ることで自分を表現することができ、それを扱うことによって他の参加者とリズムなどを共有し、更に言語を用いることで打ち解けることが出来る。そして、その能力を将来最大限に生かすためにこの能力に磨きをかけようと今は考えている。まずは世界共通言語である英語の習得や、コミュニケーションについて深く学ぼうと思う。

## コーチからの講評

### 根岸 陽太（法学部 国際関係法学科 准教授）

ジャン・ピクテ・コンペティションへの参加は、国際法教育プロジェクト・KARDIANOIA（カルディアノイア）の一環として企画されました。KARDIANOIAの目的は、「国際の狭間に置かれた人々に寄り添う」ことのできる【心（KARDIA）】を備えた人間を育成すること、入管・外交・戦争・裁判といった様々な場面を模擬的に体験することで実践的に【知（DIANOIA）】を獲得することです。本大会に参加した学生は、まさに「心と知」を養うという本プロジェクトを体現するような存在です。知的好奇心と強靱な向上心を兼ね備える井上凛太郎さんは、国際人道法の知識や国内大会にも参加した経験値などを活かして、チームに「知」をもたらしていました。ダンスサークルで活躍する内山敬太さんは、もしまえの明るさとリズム感で、言語コミュニケーションでは測りきれない「心」をチームに吹き込みました。真面目さと安定感でチームを支えた松田早矢さんは、誰もやりたがらないロジスティック作業や、チームメンバーのコミュニケーションの円滑化に務めて、文字どおり「心と知」をつなぐ要となりました。多様な個性をそれぞれ伸ばしながらも、チーム一丸としてまとまったことは、それぞれが接頭語「cum-（共に）」を語源に持つ言葉をキーワードとして挙げていることから読み取れます。

本大会への参加は、2019年度法学部教育支援プログラムの支援対象となっており、参加費や渡航・現地滞在費の大部分を支援していただきました。また、大会に向けての事前準備では、チームメンバーの先輩にあたる上村知弘さん（法学部・国際関係法学科）に手厚く援助してもらいました。アメリカンフットボールで競争力やチームコミュニケーションを磨いてきた彼の助言がどれほどチームメンバーを支えることになったか言葉で表現しきれません。ご支援いただいたみなさまにこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

報告書作成者:  
法学部 国際関係法学科  
2年 井上 凜太郎

*Thankyou for reading!*

国際の狭間に置かれた  
人々に寄り添う

心と知

KARDIANOIA

HP: <https://www.seinan-kardianoia.com/>